

ニュー・ペインティングの時代

ニュー・ペインティング登場の背景

ニュー・ペインティングとは、1980年代に世界同時に興った具象絵画の運動のこと。新表現主義とも呼ばれたこの運動を説明するためにはその前の70年代の美術と比較する必要があります。

70年代に主流だったのは、「最小限」を意味するミニマル・アートやアイディアやコンセプトを必要不可欠な要素とするコンセプチュアル・アートでした。日付を書いただけの作品や四角い箱が転がっているだけ……というような作品たち。それらは作者の主観や主張を持たず、素材の見た目をそのままモノとしての存在を見せるように使用した立体作品を中心でした。しかし、80年代になるとそれに反発するかのように具象絵画を表す作家たちが現れます。その特徴としては、大画面で絵の具を厚く用いて描かれた荒々しいテクスチャー、神話や歴史、あるいは個人的な記憶といった物語性を思わせるモチーフを描いたことなどが挙げられます。多くは大画面に描かれ、同時に平面の絵画だけでなく、割った陶器を画面に張り付けその上に絵画を描いたり、立体を組み合わせたりしたものもあります。最小限しか表さない、アイディアがもっとも重要な要素であるとした無機質な70年代のアートから感情を激しく表した作品に注目が集まつた時代でした。

80年代は経済が豊かな時期だったことも重なり、作家たちが華々しく活躍した時代です。その中にはニュー・ペインティングを代表するシュナーベルやバスキア、キーファーだけでなく、グラフィックアーティストとして有名なヘリングや60年代から活躍し、現在まで現代美術の最先端をけん引してきたリビターなどもいます。本展では、リビターの色彩乱舞するアブストラクト・ペインティングや大竹伸朗、横尾忠則ら日本の80年代の作品もご覧いただきます。1点1点の作品が大きいことからまとめて展示する機会の少ない作品約20点をご覧いただける機会をお見逃しなく！

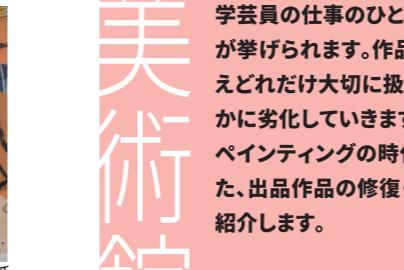
文◎柳澤宏美(本展担当学芸員)

歴史、神話、エロス…体感する80年代



著作権の都合上、表示できません。

当館所蔵のバスキア作品『フーア』を調査



学芸員の仕事のひとつに所蔵作品の保存管理が挙げられます。作品は「もの」である以上、例えどれだけ大切に扱っても、経年に伴って緩やかに劣化していきます。今回は企画展「ニュー・ペインティングの時代」の開催準備として行った、出品作品の修復・メンテナンスの様子をご紹介します。

世界中でバスキア展を企画してきた研究者ディーター・ブッハート氏が当館所蔵のバスキア作品『フーア』調査のために来館しました。1982年作の本作は四隅と真ん中の上下のバーがクロスするように突き出ている変形カンヴァスの上に紙が貼りあわされており、何重にも重なった層のようになっています。ブッハート氏は作品に描かれた王冠や人物だけでなく、書き込まれた文字も大変興味深く、見れば見るほどいろいろな要素が出てくる作品だと熱心に調べられました。

バスキア作品の特徴を見られる『フーア』。ぜひ展覧会場でご覧ください！



フランチェスコ・クレメンテ『真夜中の太陽』



コレクションテーマ展(3) 建築家・磯崎新、内藤廣の仕事 石元泰博写真展

「建築写真家」としての石元泰博

1953年、当時アメリカの大学で写真の勉強を終えたばかりの石元泰博が帰国した理由は、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が開催する展覧会の調査とお手伝いでした。その展覧会とお手伝いの中には日本の建築家としていたものがあり、丹下健三、前川國男、坂倉準三といった気鋭の建築家と出会います。この出会いから「建築写真家」としての石元泰博が始まります。

1953年、当時アメリカの大学で写真の勉強を終えたばかりの石元泰博が帰国した理由は、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が開催する展覧会の調査とお手伝いでした。その展覧会とお手伝いの中には日本の建築家としていたものがあり、丹下健三、前川國男、坂倉準三といった気鋭の建築家と出会います。この出会いから「建築写真家」としての石元泰博が始まります。

磯崎新の建築

多様性、歴史性などを特徴とするポストモダン建築の代表作としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎天野圭悟(当館学芸員)

高知県立牧野植物園内にある牧野富太郎記念館の設計者としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎塚本麻利(当館学芸員)

当館が誇るバスキアの大作『フーア』もメンテナンスの対象でした。本作では、作品裏面に装着されていた、作品を壁に掛けるために用いるフック「ヒートン」がすっかり錆びていました。通常、作品にもともと付随していた部品は極力残しますが、ヒートンが錆びてしまっては作品を安定した状態で展示することができません。今回は劣化したヒートンを錆びにくいステンレス素材のものに付け替えることになりました。



コレクションテーマ展(3) 建築家・磯崎新、内藤廣の仕事 石元泰博写真展

1953年、当時アメリカの大学で写真の勉強を終えたばかりの石元泰博が帰国した理由は、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が開催する展覧会の調査とお手伝いでした。その展覧会とお手伝いの中には日本の建築家としていたものがあり、丹下健三、前川國男、坂倉準三といった気鋭の建築家と出会います。この出会いから「建築写真家」としての石元泰博が始まります。

磯崎新の建築

多様性、歴史性などを特徴とするポストモダン建築の代表作としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎天野圭悟(当館学芸員)

高知県立牧野植物園内にある牧野富太郎記念館の設計者としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎塚本麻利(当館学芸員)

当館が誇るバスキアの大作『フーア』もメンテナンスの対象でした。本作では、作品裏面に装着されていた、作品を壁に掛けるために用いるフック「ヒートン」がすっかり錆びていました。通常、作品にもともと付随していた部品は極力残しますが、ヒートンが錆びてしまっては作品を安定した状態で展示することができません。今回は劣化したヒートンを錆びにくいステンレス素材のものに付け替えることになりました。



コレクションテーマ展(3) 建築家・磯崎新、内藤廣の仕事 石元泰博写真展

1953年、当時アメリカの大学で写真の勉強を終えたばかりの石元泰博が帰国した理由は、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が開催する展覧会の調査とお手伝いでした。その展覧会とお手伝いの中には日本の建築家としていたものがあり、丹下健三、前川國男、坂倉準三といった気鋭の建築家と出会います。この出会いから「建築写真家」としての石元泰博が始まります。

磯崎新の建築

多様性、歴史性などを特徴とするポストモダン建築の代表作としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎天野圭悟(当館学芸員)

高知県立牧野植物園内にある牧野富太郎記念館の設計者としても知られる内藤廣。数多くの内藤廣の作品の中で、石元泰博は鳥羽市立海の博物館、安曇野ちひる美術館、牧野富太郎記念館、倫理研究所富士高原研修所の撮影を行っています。特に牧野富太郎記念館のプリントは、写真集にも載っていない、いろいろな角度から撮影されたものが見逃せません。

文◎塚本麻利(当館学芸員)

当館が誇るバスキアの大作『フーア』もメンテナンスの対象でした。本作では、作品裏面に装着されていた、作品を壁に掛けるために用いるフック「ヒートン」がすっかり錆びていました。通常、作品にもともと付随していた部品は極力残しますが、ヒートンが錆びてしまっては作品を安定した状態で展示することができません。今回は劣化したヒートンを錆びにくいステンレス素材のものに付け替えることになりました。